

## 第2回北海道支部会の報告

支部長 堀 元 進 (3期生)

今年の第2回北海道支部総会、懇親会は9月29日(土曜日)に昨年と同じ会場、札幌テレビ塔ホールにて開催された。昨年の設立が支部の誕生日にあたり、今年で満1才。人間で言えばハイハイもお手のものになり、そろそろ歩き始めようかという時期。少しずつ成長の証しが見える頃である。

昨年の発足までには実に5年以上の月日を要した。我が母校が存する沖縄県は日本最南端の県である。対して北海道はその対極の最北に位置。名前も「県」ではない。北海道である。「道」は古い行政区の呼称であり、基本的には「県」に相当する。「県」と異なるのは歴史的に県の出た藩の存在や中央政府との明確な関係を持たない地域につけられた行政区名称である。つまり北海道はあくまで日本本土ではない「外地」の歴史を持つ。それ故、本州の事を「内地」と呼ぶ習わしが長く続いている。この「内地」という呼称への微妙なニュアンスへの感覚は沖縄と北海道のみが持つそれであろう。地理的要因と歴史的要因を複雑に内包した南と北の共通点である。その北の地が南と異なる点、それは比較にならない広さ、洒落を含めて「でっかいどう、北海道」といわれる所以である。

現在、北海道の中心は札幌。人口180万超の政令指定都市である。歴史的には80年程前までは商都、小樽や函館が北海道の中心地であった。

札幌は地理的に中心に近いが、その存在価値は単に行政府が置かれた場所、つまり、自然発生都市ではなく政治的に新しく作られた小さな町であった。沖縄における首里王府と商都那覇は距離にして数kmの関係。札幌と函館は実に260km超離れている。桁が2つ違う。道東の中心、釧路とはおよそ330km。つまり、一言で「同窓会で集合」と言っても容易ではない現実がある。

企画から声かけの段階でわかった事、それは都合のつく同窓生が集う会で良しとする事、毎年の継続の中からその存在意義の発生が期待される事である。

第2回同窓会は総会の中で本部や東日本の活動報告、同窓会が抱える諸問題について情報交換を行った。懇親会は大いに盛り上がり、同窓生同士の絆を深める又と無い機会となって来ている。昨年に引き続き、北海道出身の佐藤良也名誉教授、札幌にゆかりのある砂川元教授の御来席も頂いた。「気持ち」が集っている。良い支部になりそうである。

来年も又、真紅のカエデがイチョウの黄色を背に映える北国独特の深い紅葉の時期に開催予定。深まりゆく北海道に暖かい沖縄の南風が吹く一時を作りたいと考えている。

